



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	移行過程支援研究の課題
Author(s)	宮崎, 隆志
Citation	子ども発達臨床研究, 3, 35-44
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38180
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_p35-44_MIYAZAKI.pdf



移行過程支援研究の課題

宮 崎 隆 志*

Problems with Studies on Youth Transition Support

Takashi MIYAZAKI

要 旨

移行をコミュニティの境界横断として考えることによって、以下の点が明らかになった。

第一に、移行には共時的移行と通時的移行がある。

第二に、通時的移行は、共時的移行の主導的コミュニティの変化として理解可能である。

第三に、生きづらさは、その人の世界を構成する諸コミュニティ間の横断が困難になること（諸コミュニティのフラグメント化）によって引き起こされる。

第四に、共時的移行の困難／容易、通時的移行の困難／容易の二系列を組み合わせることによって移行の四類型を析出できる。

第五に、移行支援実践も、この類型間の相互転換に即して分析可能である。

キーワード：移行、諸コミュニティのフラグメント化、自己内他者、非行、社会的ひきこもり

I 問題の所在

あるコミュニティから別のコミュニティへの移動を移行と呼ぶ。より正確に述べれば、移行とはコミュニティ間の境界横断過程を意味する。したがって移行は連続性と共に不連続性を特徴とし、それ故に、新たなコミュニティにおいて新しい自分を創る過程であると同時に、自己崩壊のリスクに直面する過程でもある。

このような移行の特質が最も顕著に表れるのが若者の移行過程であろう。若者はいつの時代でも、新たなコミュニティへの参入者であり、コミュニ

ティとコミュニティの境界横断者である。遊びが主導する世界から学習が主導する世界へ、更に労働が主導する世界への移行は、遊びが学習の準備となり学習が労働の準備となるように、連続性の面は前提されねばならないものの、活動の質が転換する不連続面を渡りゆく過程と言って良い。そしてこの経験によって諸個人は質的な発展を遂げ、自立した人格が形成されていく。

しかし、現代の移行過程は近代以降の移行過程とは明らかに異なる様相を呈し始めている¹⁾。現象的には移行過程の長期化や複雑化と言われるものであるが²⁾、内容的にはコミュニティ間の距離と不

*北海道大学大学院教育学研究院 教授

連続面が拡大し、移行のリスクがかつてなく拡大したことに現代的な特徴を見出すことができる。コミュニティ相互の区別と関連は、活動の質とともに制度によっても規定されているが、グローバリゼーションの展開や「ポスト・フォードイズム」として語られる事態は、活動の質に変容をもたらし、従来の社会構造を前提とした制度の限界性を明らかにしたと言えるであろう。若者の移行過程に即すると、問題の焦点は労働の場とともに、学校という制度とそこにおける学習活動にあり、また家族に依存した福祉制度・実践も不可分の問題群として浮上している³。

このような状況を前提にしつつ、小論では以下の点に課題を限定する。第一に、このような状況の下で生じている諸コミュニティの不連続化（フラグメント化）が人格形成において意味するものを把握するための枠組みを若干の事例をもとに検討する。その場合、諸コミュニティの限界線上に置かれた人々に焦点を当てることによって、当該コミュニティの本質およびコミュニティ間の関係の質が明示的になると思われるため、対象は社会的ひきこもり状態を経験した若者および非行経験のある若者とする。第二に、支援実践あるいはエンパワーメントのための実践の特質について検討する。政策的には、臨床心理士資格を有する者がカウンセリング対応に重点を置いた支援の担い手として学校や若者支援施設に配置されつつある。そのことの意義は評価しつつも、ここではコミュニティの質的發展とその相互関連を支えることによって諸個人の発達を保障する援助に着目し、現代の移行過程に求められる援助の課題について試論的に検討する。

II 非行・社会的ひきこもり経験者の事例から

本センター子ども支援部門では、非行およびひきこもり経験を有する若者へのインタビュー調査を行っている。対象は若者サポートステーションや若者自立塾の利用者、地域生活支援 NPO の利

用者、非行と向き合う親たちの会の関係者であるが、小論は、その調査過程の初発でのまとめであり、仮説を導くための素描にとどまるため、事例に関する説明や属性の紹介は省略する。本来ならば事例の類型化や問題の構造に照応した位置づけが不可欠であるが、ここでは現時点での諸事例の包括的な特徴を示すにとどめる。以下ではプライバシー保護のために、事例を直接示すことはせず、要点となる項目のみを列挙する。また、インタビューで得た知見を代表するものとして既に公刊されている体験手記も部分的に利用する。

(1) 非行経験者の事例から

1) 家族の不安定さ

「普通の子の非行」の増加が指摘されているものの、親のアルコール依存症や家庭内暴力・虐待、硬直的な家族関係およびそれらと密接に関連する経済的貧困が存在する事例は少ない。加害の背後にある被害⁴は重要な特質である。

(II-a) 小学生の頃、父親から度々暴力を受ける。父母の離婚後、本人が家族に暴力を振るうようになり、鑑別所に入所するが、本人は「注意しただけ」と考えていた。

硬直的な家族関係は、「普通」の家族でも見られる。親の価値観が何らかの原因で一元化（例えば学校・教師を絶対視した依存など）すると、家族間の関係も硬直化しがちである。

(II-b) 「私は子どもたちに少しでも豊かな人間性を備えて欲しいと、親としてできる限り知的に、また自然に親しむような家庭環境を整えてきたつもりであった。しかし、娘は少しも興味を示さず、低俗なテレビ、マンガばかり好んでいた。そんな姿を見ると口には出さないまでも、当惑と軽蔑が込み上げていた。」⁵

(II-c) 「ずっと学校第一で考えてきたので、先生の指示は忠実に守ってきた」（母親）

2) 学校からの排除

非行少年のほぼ全てが学校への反発を示すこと

は敢えて述べるまでもない。但し、それに対し学校が排除的で非寛容的な姿勢⁶をとって対応する傾向が強まっていることは、やはり確認しておかねばならない。

(II-d)「お母さん、今のままの生活を続けたら、将来取り返しのつかないことになりますヨ。身体をしぼりつけてでも家に置いて下さい」「あのグループから切り離すことにもっと協力して下さい」とのことでした。…(中略)…担任から、電話のたびに、「夕べの午前一時にコンビニの前にいたそうです。夜は外へ出さないで下さい」などと言われ、私はこんなに追いつめられたら、この子を殺してしまうかもしれない、そんな思いがこみ上げてきました」⁷

このような子どもに対する管理対応は、当事者たる少年自身が最も強く受けていることは言うまでもない。念のために次の手記を引用しておく。
(II-e)「学校なんて個性をつぶすところではない。集団生活？確かに大事かもしれない。でも何？「人のことを考えなさい」って。その人たちが私のこと少しも考えてくれなくても、そんな風に思って生きていなくてはいらないのだろうか。理不尽だ。人の数だけ違った人生があって、未来があって、それぞれでいいはずだ…(中略)…他人の価値観でもって、自分の行動を抑制されるのって本当に嫌なことだ」⁸

3) ステイクホルダーとしての保護者の要求

学校の非寛容的で管理的対応は保護者の同意と支持の上に成り立っている。非行の蔓延、学校の荒れの原因が特定の集団や少年にあると理解される場合、当該集団・少年を管理・隔離して欲しいという要求が、「普通」の子どもの保護者から発せられるのは必然的であろう。非行の親どうしの間でもそのような理解が生じがちであるという。ちなみに、以下にあるような「責め合う関係」は夫婦の間でも、同様の論理に基づき生じがちである。
(II-d)「Aさんは「こんな事件にかかわったのは、あなたたちに引きずられているからだ。この事件が解決したらあなたたちとはつきあえない」と攻撃的でした。…(中略)…どうしても「非行」グループの子の

親たちは、「お宅の子のせいで、うちの子が」と責め合う関係になりがちで、私たちもそんな関係から始まりました」⁹

4) 地域社会からの排除

非行が逸脱現象として理解されると、非逸脱者の側は逸脱の事実を受容することは難しい。自己を否定する他者を肯定することは自己が動揺することにつながるからである。ある親は保育園時代からの友人と路上で会った際に、「大変だね」と共感の言葉をかけてくれたものの、視線を合わすことを避けるという態度から、できるだけ早くその場から去りたいというメッセージを同時に読み取ったという。それを非行少年たる息子に話したところ、彼は「そんなことはずっと前から感じていた」という。

その結果、その親は近隣の親たちと顔を合わさぬよう夕食時間帯に別の校区のスーパーで買い物をするようになった。転居しない限り、近隣地域社会では息を潜めて暮らさざるを得ない。孤立化した家族が抱え込むストレスは想像を絶するものになる。

(2) 社会的ひきこもり経験者の事例から

1) いじめられた体験

厚生労働省の調査によると、若者サポートステーションや若者自立塾の利用者の55%が学校でいじめられた体験を持っている¹⁰。その理由はさまざまであるが、これまでの調査事例に基づく限り、一時的というよりは数年にわたる長期のものが多し。

(II-f)「小学校の時にいじめられたが、小さな町なのでその人たちと中学・高校の間、ずっと一緒だった。」

2) 学校への否定的評価

いじめられた場合はもとより、いじめられたという明確な自覚がない場合でも、学校への違和感あるいは不充足感が語られることが多い。学習面での遅れが自覚されている場合もある。

(II-g)「中学は圧迫感があった。荒れる奴もいたけ

ど、それにははじめなかった。小中高と楽しい思い出はない」

(II-h)「中学の先生にはいい思い出どころか恨みがある。一方的に髪を切られた。その頃のことをあまり思い出したくない」

3) 挫折体験

これまでの聞き取り調査では、一様に「動けなくなってしまった」、「何がやりたいのかわからなくなってしまった」という声が聴かれたが、その前段では自分の関心のある分野の模索や困難な状況を乗り越えるための努力がなされている。それが行き詰まった時に、代替的（この表現の妥当性は保留しつつ）な方向性が見いだせないまま、立ちすくむ状況が生まれている。何らかの挫折体験がひきこもり状態への引き金になっている。

(II-f)「大学受験に失敗し、(町から出て行きたかったのに) 町に留まることになった」

(II-h)「趣味に関わる専門学校に通ったが、想像していた内容と違った」

4) 家族関係におけるストレス

これまでの本人たちからの聞き取りの限りでは、ひきこもり状態になっても家族関係が急激に変化することはなかったようであるが、本人たちは家族の表情や対応から家族のストレスが高まっていると感じ取っている。なお、経済的な状況には各事例で差異はあるが、自宅に居住する条件はいずれも確保されていた。

5) 焦燥感と後ろめたさ

自宅にひきこもっている期間も焦りは消えない。近所の視線が気になり、日中は出勤する振りをした経験があると語ってくれた方もいた。

(II-h)「近所の人とは今も会いたくない。後ろめたさはある」

(II-i)「世の中に置いて行かれる焦り。社会に参加していない罪悪感」

III 移行の困難と生きづらさの構造

(1) 事例が提起する論点

以上のごく簡単な事例紹介から次のような論点を確認できる。第一は、移行過程において家族という生活単位が有する意義と限界について、である。エリクソンやハーマンが指摘するように、家族は基本的信頼を形成する主要な場であり、人格の存在論的な安定に密接に関わるコミュニティである。このことは自明とも言えるが、事例が示唆するように家族の不安定さの増大が、基本的信頼のありかたを媒介として移行の困難さに関わっている。

家族の不安定さは経済的貧困によって生ずる面が大きいものの、その場合でも不安定さは世帯員内外の関係の質として現れることに留意すべきであろう。つまり、経済的貧困は生活の選択肢（自由度）を制限し、関係の質を単線化しがちである。時間・空間（＝家族資源）が物理的に制限され、家族員相互が適切な配慮を含む応答関係を維持できなくなることで、つまり一方的で非受容的、あるいは強制的な関係しか保てなくなることが、ここでのいう単線化であるが、このような関係が家族の不安定性と脆弱性をもたらすと言える。

このような意味での家族関係の単線化は経済的貧困のみならず社会的・文化的な抑圧によっても生じると言える。企業社会を前提とした学校的価値の家族への浸透は、家族関係の単線化の重要な要因である。このような傾向は経済指標に基づく中間層から上層に至るまで広汎に現れる。また、非行やひきこもりなどの出来事（家族危機）が生じたときに、単線化が顕著になることもある。例えば、母親の子育てのみが責められるというような家族間のジェンダー規範の顕在化によって単線化が強化される場合も、これにあたる。

単線化は価値の一次元性を意味するから、他者の異質性を前提とした対話的關係の対極にある。つまり、モノローグ的關係が支配的になるのであるが、そうするとII-eが学校について語っていることと同じことが家族においても生ずることにな

る。現代の家族がこのような意味での単線化傾向を強めつつあるとすれば、移行過程において果たす役割は限定的なものとならざるを得ない。つまり、単線的な路線（競争的秩序への同調）によって串刺しにされた移行経路が確実に描け、かつ本人がそれに従って順調に歩める場合には移行の基盤たり得るかもしれないが、それでも基本的信頼の形成にリスクがある場合は、移行の脆弱性は回避できない。ひとたび危機が生じた場合に、家族が孤立する可能性も高いように思われる。

第二は、学校の機能と排除との関連構造およびそれが若者の人格形成において有する意味についてである。この点については膨大な先行研究が存在するが、本調査から導かれた関心をひとまず記しておこう。思春期以降は基本的信頼の獲得を通して形成された自己内他者が多様化し、家族、特に母親との関係における自己を脱構築していく過程である¹¹。遊びや学びという活動を通して仲間の中の自己を形成し、自己内他者としての母親を三人称化していく過程と考えてもよい。この期間に関わる学校は、再構成された自己を社会的自立・職業的自立へと媒介していく役割を担う。言い換えれば、仲間の中の自己を社会的な自己として形成していく場であるのであり、学校は社会のシンボリックな機能を同時に担わなければならない。

しかし、上記の事例はここに述べたような意味での学校の社会化機能が排除性を帯びていることを改めて示している。その一つはいじめによる仲間関係の形成あるいは自己内他者の豊富化の困難さである。このような状況では、自立の基盤を学校以外の場に求めるか、それを求めること自体を延期するかのいずれかの対応が主流となるであろう。第三の対応として、そのような学校を変革することによる自己形成という回路もあり得るが、現実には厳しい。

もう一つは、教師の排除的対応である。いわゆる「レッテル張り」も含めて、若者たちの現状と将来を決めつけるような語りが、II-eのような反発を呼ぶ。より重要なのは、このような教師のメッ

セージに社会的なメッセージを読み取ることであろう。つまり、教師の言葉は少なくとも他の保護者の支持を得ており、たとえ抑圧的であってもひとまず正当性がある。大人たちの社会の代弁者として教師が理解される限り、教師への反発は、それを媒介にして社会、つまりモノローグ的な大人の世界への反発やあきらめに転回する。

このような経験を通して、学校から排除された者は独自の自己形成の基盤を模索せざるを得ず、同時にそれを、自己と社会とを統合することへの絶望の中でなさねばならない。さらには、このことが自覚（意識化）されず、身体が変調を来す場合もある。自己形成の限界線上に置かれ悲鳴をあげる身体に対し、自分一人で対処するのは酷しか言いようがない。

第三は、地域社会からの排除である。地域社会は多様な諸個人、多様なコミュニティによって構成される社会であり、企業のように利潤追求や効率性という単一の目的・価値観によって組織される社会とは異なる。もちろん多様性と同時に統合性もあるため、コンフリクトの坩堝という側面も常に備えているものの、学校や家庭に比べれば、自由度は高いはずである。

しかし以上の事例は、多様性は自由度を可能性として持つだけで、場合によっては孤立化をもたらしやすいことを示している。例えば地域ぐるみの「非行撲滅運動」や公民館等で開催される「ニートにならない子育て」講演・学習会が、相互監視やスティグマを生じさせ、地域社会が息苦しい場になることは珍しいことではない。地域社会が生きづらさを解放する契機を備えるためには何が必要かが検討されねばならない。

第四は、ダブルバインドの解決論理の検討である。非行であれ、ひきこもりであれ、公式に発せられるメッセージとインフォーマルなメッセージ（メタ・メッセージ）が逆の意味をもち、かつその場から脱出できない状況に当事者は追い込まれている。このような状況をダブルバインドというが¹²、自己を構成する他者関係が肯定・否定の両面を同時に持つに至る事態と言い換えても良い。本

人もその親もこのような状況に追い込まれるが、ダブルバインドは一方では人格の危機をもたらすが、同時に他方では関係や活動の質が転換する契機ともなる。焦点はその解決の仕方にある。Y.エンゲストロームはその解決の爆発的な仕方と漸進的で拡張的な仕方の区別を行っているが¹³、後者の成立条件を探究することが必要であろう。

(2) 分析のための基本枠組み

1) 移行概念の再定義

以上の論点を探究するための枠組みについて試論的に述べておく。先に移行をコミュニティの境界横断過程として定義したが、その際に留意すべきは、次の3点である。第一は、コミュニティは所与のものではなく、主体の活動により形成される点にある。参入や参加として語られる出来事は、形式的には「入会手続き」のアナロジーで考えてもよいが、実質的には活動に加わり、共に活動することを意味している。したがって境界横断として表現される場面では、活動が質的に変化することになる。さらに、活動の質は現象的には対象や動機の差異であるので、境界横断過程では主体の動機が変化する。

第二は、以上の理解に基づくと、移行は通時的のみならず共時的な境界横断過程とも言え、その両者の関連を移行の動態過程として理解する必要がある。つまり若者たちは、学校というコミュニティに属しつつ、同時に家族というコミュニティに属し、さらに部活動やサークル、場合によっては非行集団などの多様なコミュニティに関わっている。就職した場合も同様である。これらのコミュニティの間の移動も移行といってよい。

第三に、そうすると、垂直的な移行は単に学校から企業へというような単純な図式では語れないことがわかる。水平的・共時的に複数のコミュニティを横断することによって形成されていた構造が変化し、再構築される過程が垂直的・通時的な移行と言えるであろう。これまで主導的活動の変化として語られていたことは、ここではコミュニティ間の関連構造を規定する主導的・支配的なコ

ミュニティが入れ替わること（例えば家族から学校、そして企業へ）として理解できる。そうなる、分析の焦点は構造変化の主導因とその過程でのコンフリクトおよびその調整論理に置かれることになる。

2) 諸コミュニティの断片化アプローチ

以上のように移行をとらえなおすことによって、移行過程における生きづらさの構造やその解決のための援助実践の課題についても、従来の個人ベースの臨床的アプローチとは相対的に異なる新たな視点から検討することが可能になる。

先にみた事例では、いずれも家族・学校・地域社会の中でコンフリクトが発生しているのみならず、それらの間に矛盾が生じていた。各々が相互に反発しつつ共鳴しあうという複雑な構造が形成された結果、諸個人は共時的な移行が困難な状況に陥いる。最初は小さな反発や違和感であったものが、コミュニティ間の対立という次元にまで展開することによって、一個人ではもはや解決できないようなコンフリクトが形成される。「学校にも家庭にも地域にも居場所がない」という状況においては、このような構造が形成されているように思われる。

各コミュニティ間の対立が激化すると、相互に排除する側面が強くなる。例えば、各コミュニティが内部の秩序（安全）を重視し、秩序破壊者や逸脱者を排除する傾向が強くなると、そうした対応をとれず問題を解決できない他のコミュニティは非難の対象になる。いわば各コミュニティの「保護主義（＝排外主義）」が強まることによって、コミュニティ間の分断が生じるように思われる。ここではそれを、諸コミュニティの断片化（フラグメント化）と名付けておきたい。

このような断片化は、より長期的・社会的な変動の結果としても生じている。先に家族関係の質が単線化することにより、移行の基盤としての役割が限定的になっていると指摘したが、学校においても「学びからの逃走」（佐藤学）が指摘され、社会への媒介機能は限定的になったと言える。ま

た企業に即してみても日本的経営の見直しとともに諸コミュニティに対する支配的機能は低下しつつある。このような変化が資本蓄積の構造変化という長期的波動によって生じているとすれば、諸コミュニティの断片化もそのような観点から検討される必要がある。また、各コミュニティの境界は、先にも述べたように制度的にも規定されている。このような長期波動の変化の中で、それに対応すべく制度改正が試みられるが、今日の市場原理を前提とした政策が基調にある限り、例えば種々の自立支援政策のように、逆に制度的分断が進むことも考えられる。

3) フラグメント化と人格構造

コミュニティが断片化することは、他者関係が分断されることを意味するから、自己内他者も統一性をもたなくなる。逆に言えば、自己という存在そのものは、諸コミュニティが有機的な関連を持つ時に安定したものとなるのであり、フラグメント化の下では自己のまとまりは維持しがたくなる¹⁵。

このような状況において自己のまとまりを回復しようとするれば、何らかの統一的極を形成することが必要になる。すべての既存コミュニティに反発し非行集団を基軸とすることによって、反発をエネルギーにしつつ自己の全体性を回復しようとする場合もあれば、競争に勝ち残ることや個人的関心の追求を命題化し、コミュニティ間のコンフリクトを相対化する対応もあり得る。後者の場合は、それが挫折した時に、代替的な統一方策を見つけることは容易ではなく、立ちすくみ「何をしたらいいのかわからない」状態に陥ることも実は表裏一体に展開している。

4) 通時的移行の四つのタイプ

以上の仮説に基づくと、垂直的・通時的移行は次のタイプに類型化することが可能であろう。第一は諸コミュニティが有機的な関連構造（相互前提）を持ち、共時的移行が相乗効果を生むような経験を積み重ねつつ、その延長上に新たな主導的

コミュニティが位置付くことによって通時的移行が成し遂げられる場合である。第二は、共時的には相互前提的な移行経験を持ちながらも、新たに位置付いたコミュニティがそれまでのコミュニティの有機的な関連構造を変質させ、破壊する場合である。第三は共時的にはフラグメント化した移行経験しかなかったものの、新たなコミュニティが付加されることで、諸コミュニティの相互関連が整序され、有機的な関連が生ずるようになるという通時的移行である。第四は、共時的にフラグメント化した諸コミュニティ構造が、新たなコミュニティの付加によっても変わらず、場合によっては断片化が一層深刻になるような通時的移行である。

第一の場合は、相互前提的なコミュニティ関係での経験が資産となり、通時的移行はそれを拡充する過程となる。第二の場合は、新たなコミュニティの支配力次第で、それまでの相互前提的なコミュニティ関係での経験が、抵抗の基盤となる場合もあれば、粉碎されてしまう場合もある。第三の場合は、回復や立ち直りとして語られる事例と密接に関わっている。第四は、事態が一層複雑化し、危機的状況に直面するような場合である。

様々な移行形態をこのように分類できるとすれば、次の課題は各類型間の相互関連（転化）と四つの類型ごとのコミュニティ間の関連構造の再編論理の解明である。ここでは後者についてのみ補足しておこう。コミュニティ間の関連構造の再編については、個人の「物語」とその変化として把握することがさしあたり有効な接近方法であるが、その場合にも次の2点に留意することが必要である。まず、物語の必然性を解説するには、当事者の属する諸コミュニティの状況を把握する必要がある。語りにおける主体性を尊重することと、その前提となっている客観的事実を知ることは対立しない。次に、物語の変化の二つの次元を区別することがある。すなわち、成功物語でも失敗物語であっても、続編が産み出されるように量的に展開する変化と、物語の声が変化し、物語の基調次元で変化が生ずる場合は区別しなければならない

い。後者は「物語る文法次元の変化」と比喩的に表現できる。

ここで言う物語は、自己が経験している現実を意味づけるためのものであるから、実際の移行経験との相互作用が生ずる。むしろ、こうした相互作用を通して移行過程におけるコミュニティ間の関連構造は変化するのであり、物語化の契機も含み込んだ相互作用の総体に関する分析枠組みが求められることになる。この課題に応えるためには、活動概念の導入が不可欠である。一般に活動は自己のまとまりを形成する。すなわち、客観的出来事と主観的な物語を活動によって統一し世界を構成する。このように構成された世界が自己と言える。他者との出会いによる自己の再構成が生じるのも、活動の中で意味ある他者と出会うが故である。活動の契機を消失すると、他者と物理的には出会ったとしても意味ある出会いにはならない。このような活動がコミュニティ間の関連を主体的に構成している。それ故に、諸コミュニティ間の関連は活動システムとして理解することができる。このような見方からすれば、フラグメント化は活動システムの矛盾の現象形態であり、諸コミュニティの関連構造の変化は活動システムの変化である。活動システムの変化については既に活動理論による理論的挑戦が展開している。

IV 移行過程における援助実践の課題：まとめにかえて

移行過程の生きづらさを以上のように理解してよいとすれば、援助実践の課題はコミュニティ間のコンフリクトの解決を助け、当事者による新たなコミュニティ間関係の構築を支えることにあると言えるであろう。個別的なカウンセリング対応やキャリア教育や資格取得といった教育支援も、この枠組みの中に位置づけられてはじめて援助実践としての位置と意味が明確になる。

ここではさしあたり四つの取り組みに言及しつつ、援助実践の構造についての見取り図を描いておきたい。

(1) 「少年院」

諸コミュニティから排除され、人格的自立の危機に陥るような場合（例えば非行集団への一体化が深刻になった場合）には、緊急避難的にそのような構造から隔離する対応が必要となることもある。この「必要」は社会の必要ではなく、当事者がコミュニティ間の相互前提的な関係を再構築する可能性を確保するための必要として厳密に理解されねばならない。

しかし、このような対応は隔離であるが故に、新たな物語や活動システムを構築するためのプロトタイプを「純粋培養」的に形成できたとしても、現実の（＝コンフリクトを抱えた）社会関係の下でそれを創造的・柔軟に展開することは極めて難しい。技能訓練のような取り組みも行為主体としての学習に留まり、新たな活動システムを構築するための活動主体としての学習にはなり難いという限界があるように思われる¹⁶。

(2) 「地域若者サポートステーション」

個別的なカウンセリング対応から始まるものの、それが当事者たちの集団的活動（社会関係を産み出す、就職に関わる準備活動を協同で行う、等）と連続していることによって、悩みを語ることと新たな活動へ踏み出すことが切り離されずに展開している。カウンセリングだけであればコミュニティは形成されないが、後者の活動とワンセットなることによって、カウンセリングもサポートステーションというコミュニティの不可欠の要素となっている。

このようなコミュニティが形成されることによって、家族と学校、企業からなる当事者の閉鎖的世界に今までになかった波紋が生じる。同時に、サポステに没入してしまうと他のコミュニティへの波及効果がなくなるため、単なる居場所としてよりも、スプリングボードとしての役割が自覚的に追求されている。

ここでは新たなコミュニティを形成する活動に加わることによって、過去の出来事に規定された自己物語が拡張され、書き換えられる可能性が生

じている。

(3) 「地域生活支援ネットワークサロン」

釧路市にある障害者支援を中心にした NPO であるが、若者居場所づくりや仕事起こしも展開している。ここではたまり場の中での様々なトラブルとその解決のための活動を通して形成される仲間という関係が大きな意義をもっている。自分と同質の他者もいれば異質な他者もいて、共感と反発を繰り返しつつも、メンバーの中での自分の固有の役割も発生する。相互に必要とし必要とされる経験の繰り返しの中で、他者に「つられる」ように仕事の応援に出かける（他者の必要に同調し、あるいは応える）という対応も発生する。

このような対応を基本としているため、ここでは特別なプログラムはない。援助者の援助観も「何もしていないように見える援助」がベストというものである。あくまでも当事者たちが主体的に取り組んだ結果として変化が生じたと思えるような援助と言い換えてもよい。筆者はこれまで当事者の主体性を尊重した援助を、援助によって援助が不要になる援助と表現してきたが、それを段階論として理解すると厳密に言えば主体性を尊重したとは言えない。むしろ「何もしないように見える援助」として徹底することが当事者主体の援助の課題であろう。

このような援助の結果、当事者たちは集団的・協同的な力を産み出し、それによって通時的な移行つまり自分の世界を構成するコミュニティ（家族・仲間・学校等）を移動しつつ、それらを相互に前提しあう関係に再編することを成し遂げつつある。ここでは仲間とともに活動しているうちに自然に自分の状況が変化していたという発達形態が実現している。

(4) 「のむぎ（Open Community School）」

横浜市のフリースクールであるが、ここでは旅と平和と表現に関わる活動が重要な意義を持っている¹⁷。300 km に及ぶ徒歩旅行と平和活動は、出会いがキーワードであろう。徒歩旅行は自己の限

界への挑戦であるが、その限界線上で様々な人々と出会い魂が揺さぶられる。逆に言えば自己の限界線に立たなければ、意味ある他者との出会いは生まれない。平和活動では被爆者や反戦地主のライフストーリーを聴く活動がハイライトであるが、非行やひきこもりを経験してきた若者は、社会の矛盾の究極形態とも言える戦争によって引き裂かれつつそれに抗してきた人々の人生の歩みと自己の経験とを重ね合わせる。限界線を生きる若者たちが、そのことの社会的歴史的な意味を、平和な社会を希求して闘い生きる人々から学ぶと言って良い。

そんな問いと探究を繰り返す彼らは、太鼓によって自己と社会に対する思いを表現している。この点は推測であるが、社会の限界線を歩いた若者たちであるからこそ、現代社会の闇の深さと、それにも関わらずそれに抗して生きる人の崇高さが深い情動を伴って把握されるように思われる。それ故に、彼らの太鼓はどこでも深い感動を引き起こす。

以上の四つの取り組みはいずれも固有の価値を持つとともに、活動の主体が形成されるための学習活動とその援助実践の展開論理を示している。例えば、移行類型の第二・第四類型が第三類型に転化するためには、以上の一連の取り組みがおそらく必要であろう。この援助過程を活動システムの再構築過程として分析することによって、援助過程の必然性と意義、隠されている要素等々が明らかになるように思われる。いずれも今後の課題として探求していきたい。

注

- 1 拙稿「モデルなき時代の社会教育」、日本社会教育学会『社会的排除と社会教育』東洋館出版、2006 年
- 2 宮本みち子「長期化する移行期の実態と移行政策」社会政策学会『若者 長期化する移行期と社会政策』法律文化社、2005 年、乾彰夫「『戦後日本型青年期』とその解体・再編『学校から仕事へ』の移行過程の変容を中心に」『ポリテイク』No 3、2002 年

- 3 青木紀編著『現代日本の「見えない」貧困』明石書店、2003年
- 4 藤岡淳子『非行少年の加害と被害』誠信書房、2001年
- 5 緑川静江「「高一で同棲」からの五年間」、非行と向き合う親たちの会『ARASHI その時』、新科学出版社、1999年、p 170
- 6 「ゼロ・トレランス」と社会的排除の関連については、ジョック・ヤング（青木秀男他訳）『排除型社会』洛北出版、2007年、ロイック・ヴァカン（森千香子・菊池恵介訳）『監獄という名の貧困』新曜社、2008年、船橋一男「生徒指導におけるゼロ・トレランス方式導入の問題点」『教育』No 738、2007年7月号、国土社、2007年
- 7 林久美子「手をつないだ親たち」、前掲『ARASHI その時』、pp 114～pp 115
- 8 三島寿子「まず、大人たちが変わらなければ」、同上書、p 27
- 9 林、前掲、pp 112～113
- 10 厚生労働省『ニート状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究報告書』2007年
- 11 このような指摘は竹内常一がいち早く行っている。竹内常一『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版会、1987年
- 12 非行に即してダブルバインドを指摘したのは大村英昭『非行のリアリティ』世界思想社、2002年、pp 93～97。なお、ダブルバインド論はG. ベイトソン『精神の生態学』に端を発する。
- 13 Y. エングストローム（山住勝広他訳）『拡張による学習』新曜社、1999年
- 14 ビーチはTransitionを水平的な関係も含む4つのタイプに分類している。K. ビーチ（藤野友紀訳）「共変移：

社会的組織化による知識とアイデンティティの増殖としての一般化」、石黒広昭編著『社会文化的アプローチの実際』北大路書房、2004年

- 15 レインは「他者とともにある存在」として生きることができない時に、「自分が一貫しておりまとまった存在だ」という、あの圧倒的に強い感覚」を持つことができないと指摘している。R. D. レイン（阪本健二・志賀賢彦・笠原嘉訳）『引き裂かれた自己』みすず書房、1971年、p 52
- 16 なお、学校もその保護機能を重視すれば少年院と同様の位置づけが可能であるし、若者自立塾も同様であろう。さらに、場合によっては家族が隔離機能を発揮するケースもあろう。「少年院」という見出しは象徴的なものである。以下の見出しも同様である。
- 17 のむぎ「平和のパラコンサート実行委員会」『平和のパラを』平和文化、2003年

追記：小論は文科省科研（「社会的に排除された若者の自立支援実践における社会関係資本の意義に関する実証的研究」）による協同研究の成果の一部である。執筆にあたっては院生を含む協同研究者との討議を踏まえているが、あり得る誤りも含めた文責は、もとより筆者にある。

謝辞：苦痛を伴う被排除体験や独自の支援実践の論理をお聞かせ頂いた調査協力者の方々に深甚の感謝の意を表したい。